

## 大学教育学会第33回大会に参加して

教育開発支援機構

FD推進センター長 川上 忠重

2011年6月4日（土）～5日（日）に桜美林大学多摩アカデミーヒルズ及び町田キャンパスにおいて、大学教育学会第33回大会が開催された。参加の機会をいただいたので、一部内容を紹介したい。初日は、基調講演として、「何のため、誰のための質保証」の演題で桜美林大学長佐藤東洋士氏により、国際水準での質保証が求められている中で、緊急に解決されるべき問題点について、（1）大学教育の質保証とは、いかなるステークホルダーを念頭において定義されるべきなのか。（2）評価のシステムはゴールの共有に重きを置いた大学の平準化を目指しているように見えるが創立の理念に即した各大学固有の改善ほどのように尊重・評価されるのか。（3）大学は社会人材育成のための機関たるべきことが要請されているが、学生個人の向上を目指すための学びはどのように尊重され評価されるのか。等の観点から、大学教育の質保証のあり方について考えるものであった。

引続きシンポジウム形式で、大学教育における質保証の実践的展開とその意味の観点から、「3つのポリシーの策定と一貫性構築によるカリキュラムの質保証」愛媛大学佐藤浩章氏、「GPA制度本格導入と成績評価を考える」一橋大学筒井泉雄氏、「学生調査の開発とマルチレベルFDとの連動による教育の質保証」愛媛大学山田剛史氏による報告がそれぞれ行われた。愛媛大学の佐藤氏の講演の中で、3つのポリシーの策定と一貫性構築の取組みは、（1）政策としての情報公開や外部評価対応といった説明責任、（2）学生の学習効果を最大限に高める教育・学習戦略だけでなく、（3）教職員がカリキュラム開発手法を学ぶ能力開発の機会（FD）としても位置づけ、目指すべき人材像、ディプロマ・ポリシー、アドミッション・ポリシー、カリキュラム・ポリシーの策定方法やカリキュラム評価方法の紹介もあり、あらためて、カリキュ

ラム評価の重要性について、評価方法も含めて確認することが出来た。

2日目は、18のラウンドテーブルが用意され、各テーブルに分かれて個別のテーマについて報告とディスカッションが行われた。今回はテーブル17に参加させていただいた。テーマは学生・職員と創る大学教育：FDの新発想である。内容的には、従来の「学生が何を学んだか」に焦点をおく教育から「学生が何をできるようになったか」を重視する大学教育にシフトするために必要な環境、仕組み作りのために、教育手法の1つであるPBL（プロジェクト・ベースト・ラーニング）と学生参加型FDに着目し、実際にPBLに参加した学生の感想や、PBLを推進するために必要なキーワード及び学生だけでなく職員の方も積極的に巻き込んだ形での教育改革の可能性について、活発な意見交換が行われた。企画は三重中京大学清水亮氏、富山大学橋本勝氏、パネリストとして、本学の第6回FDワークショップ「PBLによる学びの改善—有意義な取り組みとは—」（2011年7月2日（土）13：00～、小金井キャンパス 西館B1マルチメディアホール開催）の基調講演をお願いしている同志社大学山田和人氏と同学生（2名）および本学小金井事務部平野優貴氏である。

昨今のFDとして、マクロFD（全学）、ミドルFD（学部・学科）およびマイクロFD（個人）のバランスや取組み方、また大学評価や自己点検とFDとの関係が話題となっているが、今回の大会は全体として、FDと質保証の関係も含めて、FD推進センターとして今後の展開につながる多くのヒントをいただいた。今回の機会をあらたな「教育の質」保証のための提案のために役立てていく所存である。

以上